

校長だより

令和8年5月1日

大阪市立大正東中学校 No. 2

新学期がスタートして1か月が経ちました。新入生の皆さんは新しい制服がすっかり板につき、2・3年生の皆さんも新しいクラスの雰囲気ですっかり溶け込んでいるように見えます。朝の挨拶の声も大きくなり、授業や部活動に生き生きと取り組む皆さんの姿を見て、先生たちはとても嬉しく思っています。

4月のあの張り詰めたような緊張感が少しずつ解け、学校生活に「余裕」や「慣れ」が出てきたのは素晴らしいことです。新しい環境に適応しようと、皆さんがそれだけ一生懸命に頑張った証拠だからです。しかし、この「少し慣れてきた時期」こそが、実は1年の中で最も注意しなければならないタイミングでもあります。皆さんは今、「まあ、これくらいでいいか」「今日はサボっても大丈夫だろう」という甘い誘惑に負けそうになっていませんか？

そんな5月の皆さんに、ぜひ知ってほしい中国の古いお話（故事）があります。

それは、古代中国の思想家である孟子（もうし）が語った**「一暴十寒（いちぼうじっかん）」**という言葉です。

「暴」という漢字は、ここでは「日（太陽）に当てる、温める」という意味で使われています。つまり、「一日だけ温めて、そのあと十日間も冷やす」という意味です。

孟子は、ある国の王様がなかなか立派な行いを身につけられないことを嘆いて、次のような例え話をしました。

「世の中には、どんなに生命力が強くて、簡単に育つ植物であっても、一日だけポカポカと温かい日に当てて、そのあと十日間も冷たい日陰に放置してしまえば、絶対に枯れてしまいます。私の教えも同じです。私が王様にどんなに素晴らしい話をして、私が去った後に周りの悪い家来たちが王様を冷たく冷やすようなことばかりしていれば、王様が立派に育つはずがありません」

このお話から転じて、現在では**「ほんの少し努力しただけで、そのあとに長い間怠けてしまうこと」や「物事を継続してやらないため、結局成果が出ないこと」**を戒める言葉として使われています。

この「一暴十寒（いちぼうじっかん）」という言葉は、皆さんの勉強や部活動の

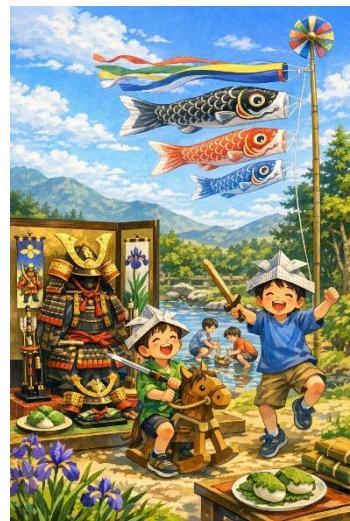
取り組み方にも、そのまま当てはまるのではないのでしょうか。

4月の皆さんは、いわば「温かいお日様」の時期でした。「今年こそは！」と燃えるようなやる気に満ち、毎日机に向かったり、部活動の基礎練習に一生懸命取り組んだりしていました。

ところが、5月になり、連休を挟んだりして生活のリズムが崩れると、今度は「十日間の冷たい日陰」の時期に入ってしまう人が出てきます。

・「定期テストの前だけ、徹夜して10時間猛勉強したけれど、テストが終わったら1週間全く勉強しなかった」

・「部活動の大会直前だけは真面目に走ったけれど、普段の練習は適当に流している」



これらはまさに「一暴十寒（いちぼうじっかん）」の典型です。

一日だけ猛烈に頑張っても、そのあと何日もサボってしまっただけでは、せっかく芽生えた皆さんの才能や能力は、冷たい日陰の植物のように枯れてしまいます。

勉強もスポーツも、そして人間関係も、本当に自分を成長させてくれるのは「一日の爆発的な努力」ではなく、「毎日の地道な継続」です。1日10時間勉強して10日休むよりも、毎日30分ずつでも欠かさず続ける方が、はるかに皆さんの力になります。

5月は、4月に植えた「やる気」という苗が、しっかりと根を張るか、それとも枯れてしまうかの分かれ道です。

せっかく4月に良いスタートを切ったのですから、ここで歩みを止めてしまっただけではもったいないです。

「今日も少しだけ、お日様に当ててみよう」。そんな気持ちで、毎日の小さな努力を「続ける」ことを意識してみましょ。先生たちは、皆さんが毎日コツコツと積み重ねる姿を、いつでも見守り、応援しています。